

表紙, 目次, 寄書, 抄録, 雑録, 漫録, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41659

明治三十年六月十三日發行

〔非賣品〕

十全會會誌

第四高等學校十全會

號 三 第

◎十全會々誌第參號目次

◎原著及實驗

○結麗阿曹篤並ニ倔亞蒞箇兒ニ就テ

高山基重

○上膊骨上顆突起ノデモンストラオン

金子治郎

○虎列刺治療血清ニ就テ(承前)

野田忠廣

○エリユトロメラルギーニ就テ

藤井伊之吉

○先天性癱瘓性關節強直症

高橋剛吉

○篤志解剖

河國分多郎

◎抄錄

○月經閉止後ニ於ケル腔痙攣ノ實驗

中村顯

○消毒藥としての銀及銀鹽に就て(アクトール及イトロール)

○肝臟硬變の治療法ニ就テ
○脊髄勞と梅毒との統計表

○Levasschev氏法と以てする助膜炎療法

以上鈴木寛之助

◎雜錄

○人体國乃人民

木村孝藏

◎漫錄

○田舎の醫者

藤岡東江

○温泉めぐり

久保輪壽

○鏡腸漫錄

松原鏡陽

○端艇競漕會

河合鷺

◎雜報

三十數件

◎廣告

二件

粘膜ハ汚穢灰白色ニシテ異常ナシ

胸腹部大動脈ニハ暗色血ヲ含有シ内面滑澤ニシテ帶黃蒼白色ナリ

脊柱ノ腰部ヲ檢スルニ推骨体及ヒ推弓ニ異常ヲ見ス

以上

右ニテ解剖檢査終ル依テ臟器ハ悉ク故位ニ容レ刃痕ハ一々縫合シテ縋帶ヲ施ス時干午後六時ナリ
診斷 結核性腦膜炎、胸骨カリエス、氣管枝肺炎、肋膜結核、脾臟結核、淋巴腺結核、腎臟炎、

寄 書

◎月經閉止後ニ於ケル腔痙攣ノ實驗 奈良縣磯城郡櫻井町櫻井病院 中村 顯

茲ニ寄稿セント欲スル月經閉止後ニ於ケル腔痙攣ノ實驗ハ不備ノ點多ク興味モ從テ慙キヲ以

テ敢テ貴誌ノ清欄ヲ瀆サンコトヲ恐ル然レモ本病ハ屢處女ニ來リ更年期以後ニ來ルモノハ其例

多シトセス故ニ淺學短見ナルニモ憚カラス寄稿スルコトハナシヌ讀者之ヲ諒セヨ

患者 中田リウ 年齢四十一 奈良縣磯城郡橫内村 農婦

明治二十九年十月十六日陰部攣縮ヲ訴ヘ我婦人科ニ來リ診査ヲ乞フ

既往症及自覺的症狀 彼カ幼時ハ健康ニシテ著シキ疾患ニ罹リシコトナク種痘ハ一回之ヲ行ヒ又痲

疹ニ罹リシモ輕ク經過シ月經ハ十五歳ノ年二月ニ初メテ潮來シ爾來間歇休止スルコトアリテ整正ナ

ラス而ノ經血月次潮來スルキニハ多クハ該當ノ期日ニ後レテ下行ス而ノ其排泄量ハ少許ニシテ凡ソ二日乃至三日持長ス廿一歳ノ時初メテ結婚シ合衾四年ヲ閱シ其夫死亡シ爾后三年間寡居シ後チ再ヒ他ニ嫁セリ而シテ未ダ分娩セシコナク亦流産セシコナシ

月經ハ漸々少量トナリ三十四歳ノ時全ク閉止セリ其時陰部灼熱疼痛シ多量ノ白帶下アリテ就蓐セシモ内科的治療ニヨリテ平癒セリト思ヒシモ爾后陰部過敏トナリ殊ニ交接ニ臨ミ陰部痙攣狀収縮ヲ爲シ疼痛ヲ感ス故ニ可及的之ヲ忌避セリ其症年ヲ逐フテ増劇シ遂ニ三十七歳ノ時全ク交接ヲ廢スルニ至レリ而ノ初婚ノ當時ハ勿論更年期ニ至ル迄ハ如之病狀ヲ一回モ患ヒシコナシ

患婦ハ平常木綿織ヲ職トス(大和木綿、奈良晒トテ著名ナルカ如ク之ノ地方農家ノ婦女ハ一般ニ木綿織ヲ業トス)然ルニ交接廢絶后ハ漸々會陰及兩脚牽引攣縮シテ作業スルコト能ハズ唯徒手消日スルモ尙朝起離蓐ノ際ニハ陰部會陰内股等痙攣ス而ノ食欲欠損胃部停滯心思鬱幽ス大便ハ一日ニ一回通利シ嘗テ膀胱及尿道ノ疾患ニ罹リシコナク利尿異常ナシ陰部及其附近ニ外傷ヲ蒙リシコナシ他覺的症狀 薄弱羸瘦ニシテ貧血セリ外陰部ハ發育良ナラスシテ脂肪ニ乏シク陰毛疎生ス會陰ノ長サハ凡ソ四仙迷半アリ將ニ觸診セント欲シ靜ニ示指ヲ腔内ニ僅カニ挿入スルヤ否ヤ腔入口ハ攣縮狀緊扼ヲ爲シテ挿入ヲ妨クルノミナラス患婦ハ劇痛ヲ感ス依テ古加因溶液ヲ塗布シ再ヒ之ヲ試ムルモ痙攣ノ爲メニ精覈ノ診查ヲ遂クルコト能ハス故ニ此日ハ唯處女膜痕及其附近ノ輕微ニ潮紅スルヲ認メシニ止メタリ其後診查ヲ企ツル毎ニ攣縮ヲ始ムルモ霎時ニシテ稍緩解ス處女膜痕ノ性質ハ比較的柔軟ニシテ剛韌ナラス即チ其附近粘膜ノ性質ト大差ナシ腔ハ淺短狹隘ニシテ其部ノ粘膜

ハ滑澤濕潤シ深層トノ縫綴ハ稍鞏韌ニシテ延展シ難シ臆皺襞ハ發育不良ナリ腹壁脂肪ニ乏シク且ツ弛緩セルヲ以テ結合診ニヨリテ輒ク子宮体ヲ觸ル子宮腔部ハ甚々小ニシテ各側ニ他動セシメ易ク子宮体ハ后傾ニシテ其大サ殆ト小鶏卵大ナリ之ヲ壓スルモ感覺過敏ナラス卵巢ハ觸レ難シ其他子宮周圍ノ結締織ニ於ケル硬結浸潤等ヲ觸覺セス

視診上處女膜痕ハ不正斷裂狀ヲ爲シ該者及腔粘膜ハ輕微ノ炎症ヲ呈ス子宮腔部ハ五厘銅貨大ニシテ僅ニ膨隆シ子宮外口ハ圓形ニシテ未タ分娩セサルヲ証シ其口徑最モ小ニシテ通常ノ消息子ヲ通スルコト能ハス適當ノ消息子ナキヲ以テ子宮內腔ノ長徑ヲ測定セス

診斷 以上ノ徵候ニ據リテ小兒子宮兼腔癭攣症ト診定ス

原因 荏苒瀰久セル老人性腔炎ニ基因スル處女膜痕及其附近ノ感受性亢進セルモノナル可シ

處女膜及其附近ノ潮紅時トシテ其部ノ小潰瘍尿道ニ過敏ノ小息肉舟狀窩中ニ疼痛性ノ疣又ハ小裂創強度ノ骨盤傾斜(交接ニ際シテ陰莖先ツ尿道ニ達スル如キ)潜伏性淋毒分泌物ニ因スル發炎疎暴ノ交接陰莖ノ過大陰腔過度ノ狹隘過淫等ハ本病ノ原因トナルト云ヒ又處女膜基礎質ノ纖維肥大及ヒ其上皮層ノ乳嘴樣増殖モ亦本症ヲ惹起スト云ヒ其夫ノ交接不能(Trajectory)モ一因ヲナスノ說アリ其他脊髓ノ疾患ニ密接ノ關係アリト云フ(即チ處女膜ヲ全然切除シタル後ニモ此症持續シ加之分娩後ニ至ルモ尙不治ナリシ例アリ)

本病ハ年少ノ新婚者ニ多ク亦神經質ノ者ニ多シトハ普通稱道スル所ナリ然レモ年齡體質等ニハ關係ナシト云ヘル說アリ

本例ハ以上掲クル原因ノ何レニ屬スルヤ判明ナラザレモ此患者ニ於テハ輕微ナル膾炎ノ他ニ變常ヲ認メサリキ

治法 消滅療法ヲ施シ膾炎ノ治癒ト共ニ攣縮モ殆ト快方ニ趣キシガ尙時々之ヲ發起セルヲ以テ處女膜切除ヲ行ハントセシモ患婦肯セスシテ去リ再ヒ來院セス

抄 録

◎消毒藥としての銀及銀鹽

に就て(アクトール及イトロール)

「ドレスデン」の名譽顧問 Dr. C. C. 氏ハ報せり彼ハ已に早より金屬銀と防腐殺菌的の創面に置くハ全く不變に且無刺戟性に留ることと証明し之れに據て實に防腐藥として觀察するを得べしと思爲せり若し創にして防腐的なるか或は創面自己及び其周圍組織に於て分裂菌を發見し又は其繁殖するに當てや直に金屬銀ハ分裂菌に因る惹起せられたる動物組織ノ分解産物と一定の抱合物を形成し此抱合物所謂銀鹽ハ顯著の消毒的性質を具備するものたるを知る故ハ防腐的金屬銀ハ創傷感染の現存及其侵襲するに際し優勢ノ作用す可へき一の消毒藥たらずんばある可からず幾多の試験ハ吾人に教ゆ其ハ此物質實に乳酸銀なることを今は「フオン、ハイデン」化學品製造場(Heiden, Dresden—Radebeul)より「Actol」の名の以て一の純粹なる貯藏し得べき製劑として盛に人工的ニ製造せらる此白色無臭にして褐色瓶に保たれ水及蛋白含有液に一に一五乃至比に溶解し得べき散劑を創傷治療に試みしに過敏なる患者又ハ清潔なる創に在ては時として一二分

より一時間に亘る持續的灼痛を發することを知り
 り試験上の成果に基くに「アクトール」の水溶液
 おして一に一〇〇〇の稠度を有するものは *Staphy-*
kokken, *Staphylokokken*, *Mizbrandbaecillen* n. s. w.
 此各菌を五分間に死滅せしめ一に八〇〇〇〇の
 稠度に在ては血清内に於てする分裂菌の發育増
 殖を制止す故に昇汞に比するに少くとも四倍強
 き殺芽力 *keimtoedende Kraft* を有す之れ等の經
 験に徴するに銀鹽の決して動物組織と破壊せず
 加之ならず分裂菌の發生を妨害し且つ銀鹽は組
 織内に溶解し此れ溶解状態を以て永く組織を浸
 濡するが故に亦た永久的の作用を望を得べし此
 性状を参照して考ふるに常用量の「アクトール」
 は全く無毒性あるの點より爾他乃傳染的疾患に
 内服若くは皮下注射は應用すべしとは眞に理論
 上に於て可能的のとなりとす又た實際上に於て
 も此理論の正鵠を失はざることを指示せり例ば望
 なき脾脱疽の二つ及重症丹毒の五の場合に於て
 「アクトール」溶液(脾脱疽は〇、〇五に二〇、
 〇銹水丹毒は〇、三一一、〇に一〇〇、〇一二
 〇〇、〇銹水)を皮下に注射せしに皆最良の好果
 を獲たる著者の實驗の如し併し時として皮下注
 射は多少の疼痛を發し或は「コカイン」又は他の
 痲醉藥を必要とすることなきにしも非ずされど
 創面に在ては已に述ふるが如く只稀れに僅微の
 刺戟作用を呈するのみにして其可溶性なるが故
 に吸収頗る迅速なりといへ大量にして且持續
 せる使用に於ても決して中毒的作用の危儉に遭
 遇することなき之れ吸収迅かなるの點より本品
 の多量を要し從て治療上不廉たるを免さず之
 に由て著者は更に他の銀鹽則ち枸橼酸銀所謂 *sil-*
ber と試みたり「イトロール」は細微に容易に粉
 碎し得べく又た貯藏し得る無臭の製劑にして試
 験上制腐作用あること確實に只彼と異なるは一

に三八〇〇の比に於て溶解すること之をなり其
一に四〇〇〇の溶液は十分間にして已に諸種の
分裂菌を撲滅し創面には一の副作用を發起する
ことなく其容解性僅少あるにより大に節約して
用ゆるも尙甚だ永き持續的作用と望み得たり假
し其價は沃度彷彿謨お倍するとも實際に於ては
廉なりと云はざるを得ず著者は七ヶ月以前より
千四百人餘の患者に試みたるに全く無反應にし
て且つ乾燥性に經過し其治癒的作用又た甚だ迅
かあるを認めたり而して防腐的主義お背戻せず
實に其要旨たる消毒的と防腐的との中庸を走ま
り著者は手術の最終に又は術中一二回創及其周
圍を無刺戟性液を以て洗洗し細未なる銀散劑を
散布せる灰白繃帶質(Graue Silberverbandstoff)を以
て創を被ふ然るときは一び分裂菌發生するや否
や直お爰に乳酸銀を生すべし又閉鎖せたる創に
は「イトロール」を散布し次で銀ガーヤSilbergaze
を以て被へり已に感染せる創にも敢て他の消毒
法を施さず只石鹼と水とを以て清淨とし之れを
「イトロール」を散布す膀胱の如き腔内洗條には
一―四に一〇〇〇〇の「イトロール」或は病器
若し腐敗性なる時は一に五〇〇―二〇〇〇アッ
トロールを用ゆ「ハイデン」製造場にては尙は爾
他の應用法を示めせり或は「イトロール」と軟骨
(一に五〇―一〇〇)として創面及諸汎の皮膚病
に試み或は手及器械の消毒液(一―四〇〇―
五〇〇〇)とし或は含嗽奄法浴湯(一―五に一〇
〇〇〇)に應用す勿論溶液は使用に際し新に作
るを最良とす含嗽及洗條には「アクトール」又た
適する場合あり之れには一―五〇、〇の一茶匙
を一碗の水お混して用ゆ「アクトール」を皮下注
射するには一回量〇、〇一を超ゆべからず。

(Vortrag auf dem 25 Congress der Deutschengeseell-

schaft fuer Chirurgie in Berlin 28v 1896)

◎肝臟硬變の治療法に就て

G. Klumpner (Berlin, I. medic. Klinik) は肝臟硬變
は尿素と利尿劑として用ゆることを稱揚せり彼
は先づ肝硬變に因する新鮮なる腹水に穿刺を施
すべきの否やの疑問を惹起せり勿論陳舊の肝臟
變おして已に屢々穿刺を反復したりしものは今
更論するの價値あし則ち腹水に因りて生する種
々の困難が穿刺を依りて假令暫時たりとも輕快
の効を収むるや明あり然も腹水にして未だ嘗て
一回だも穿刺せしとなきものには如何と云ふに
近來一般の輿論に在ては新しき腹水を穿刺する
こと乃不利なるを認みたるもの、如く著者は此
際の穿刺は効あきのみならず尙穿刺後直達的に
發せる心臓虚脱若くは胃出血の爲み卒死せるも
のを經驗せり斯の如き場合は他の多くの「リテ
ラツール」に亦た散見する所にして壓迫と免れ
たる腹部血管に急劇する過度の充盈を來たし因

て以て一方には延髓の貧血他方には胃血管の破
裂を生ずるものなりと解説するを得べし爾來原
著者は新らしき腹水を伴へる肝臟硬變は只に利
尿劑のみを以て治療せり此場合の一斑みは甘永
の〇、二を一回量とし十回を三日間用ゐる同時
に實艾苔利斯を互用し(一、〇、二〇〇、〇に浸
出し毎二時間一食匙)たりも其結果甘永療法
の愉快ある現象(口内炎腸炎蛋白尿)を呈せしと
以て著者は今甘永を最終の手段(Diurna ratio Die
letzte Entscheidung oder Mittel)として用ゆべきも
のなることを悟り偶然尿素の稜群なる利尿劑なる
ことを知れり之を數年前 Mering 及 Ruedel 等が尿素
 $\text{CO} \left\{ \begin{array}{l} \text{NH}_2 \\ \text{NH}_2 \end{array} \right.$ は善く尿酸 $\text{C}_5\text{H}_4\text{N}_4\text{O}_6$ を溶解すると
を報告せしよ基く則ち腎石患者も尿素を用ゐて
其偉効を奏することを經驗し同一の論法を據り尿
素劑に依りて著く利尿機能の増進することを發
見し同時に其心臓障害に由るものは腎臟障害に

由るものより顯著の作用あることを確めたり
著者は肝硬變に尿素(例ば伯林の Kronenapotheke
又「カールハウム」の藥品製造所等にて製せらるる
たるものは一〇〇、〇の價ニマルク半)を次の處
方を以て

Rd. Trae purae 10·0

Ab. dest. 200·0

M.D.S. Stuenq. I. Essloeffel

一・二日の後には一日量を一五・〇に其次には
二〇、〇に増加し此量を以て二・三週間持續せ
り本品は味佳良多らざるも服用後牛乳等を用ゆ
れば敢て介意するに足らず又一たびも不快なる
副作用と發せしとなく常に多量の尿利を得て腹
水の減退することを報せり

(Berliner Klin. Wochenschrift 1896 No. 1)

◎脊髄勞と煤毒との統計表

「ハイデルベルグ」の Pro. Dr. Erb 氏が近時集蒐せ

し統計表に據れば二百人の脊髄勞患者中煤毒感
染者多らざるもの僅うに十五人にして其中尙疑
はしきもの十一人確かに煤毒者ならざり一もの
は只四人(二%)なりしと云ふ曩きの日氏が報告
せしものを閱するに五百人中煤毒者ならざるも
の一〇、八%早期感染者八九、二%なり故に今此
兩回の數を合算すれば實に左の數を得
脊髄勞患者中

早期感染者 九〇、三五%

非感染者 九、六五%

(Berliner Klin. Wochenschrift 1896 No. 11)

◎Levaschew 氏法を以てする肋

膜炎療法

其法たる先つ注意して全く徐々に力を用ゐすし
て肋膜腔より大量の滲出物を排除を殊に患者初
めて胸部に疼痛を感するまでを度とす次て其排
出液と同量若しくは之れより僅かに少き量の少

しく加温せる(殆んど攝氏三〇度迄)十分の七%
殺菌格魯兒那篤倫溶液と助膜腔内に注入し次に
胸腔内より再び注入して輕微の疼痛を自覺する
に至るまで排除し更ひ同量の食鹽溶液を注入す
此進歩 *Procedur* を滲出液の性状及各場合乃特性
に從ひ二―六回を反復すへ。

(Therap. Wochenschrift 1896 No. 29)

以上四項

鈴木生抄譯

雜 錄

◎ 人体國の人民 會員 木村孝藏

この二月二十一日第五回通常會に於て木村教
授の演說せられたるものにて辯舌明徹人の肺
肝を貫き語調輕快聞く者の頸を解く而かも滑
稽にして滑稽にあらす乃ち氏に乞ふて雜錄欄
に掲ぐる事とあしぬ

予が今日の演題は人体國の人民と名け人体國と
は各個人を人民とは各組織細胞を指示するもの
なり

人体國の數は甚た頼多にして地球上のみにて數
億あり其貧富強弱の各國種々の別あり内憂外患
交々來りて隨分多忙を極む國外には至る處とし
て仇敵の存せざるなく就中虎軍結核軍の如きは
甚た強敵にして年々歳々此軍を爲めに滅亡の不
幸を招くもの幾何なると知らず加之往々國內お
間諜者(素因)あり爲めに近來各國共に防禦策を
講―其防備頗る嚴重かりと雖も數々大鷲撃大突
貫を被ひり暫くよして數千万の邦國と失ふは古
來其例に乏しからず

其國の組織たるや甚た巧妙あれども國大おして
外交多端なり又多少封建制度の如き風あるを以
て内憂も少なからず上には頭内の腦髓君主とし
て安在すると雖も九重の雲深ふ―て窺ひ知るへ

からず僅かに頭内の内閣ありて一定の位置を各大臣は列坐(中樞)せるを知るのみ外交上乃機關交際官は五官器となりて甚た敏捷お働作し骨は城廓を築き筋は軍隊を形成し神經は遞信の用となして甚た速かに上下の意と通す各地には縣廳

大体は上記の如き國にして今日迄て人多くは君主專制國と思意せり然をも強ち然るゝならず即ち各部落若くは各人民(組織細胞)に至るまで多少自治制度も行はれ自衛の道を辨し頗る自由の權力を享有す

の如き支廳ありて一定の權限は内閣に指令を待たすして内憂外患に對し臨時の處致をなすを得(反射中樞)國既に大に文物の進歩をなす故に教育拓殖務の如きは更に盡すべきの餘地なし最も經濟の道は甚だ整頓し其運轉中樞(即ち中央銀行の如きもの)として心臓あり間斷なく働き以て國內を滋ふす一朝一地方の經濟に於て不給と告ぐるときは直ちに之を補給す又一方には肺腸管れ如き開港場ありて貿易頗る頻搬而かも其輸出入多くは相平均して大約五十年間位の其國を保持するを得へし内國産物は肝、脾、唾液腺等より製せらるゝも比例的其價額少なし

此人體國の無形の大なるか如くと雖も有形的には其面積甚だ狹隘にして人民は互に肩磨穀擊して實に立錐の餘地かると謂ふへし又各人民或は其團體大に活氣を富み互の位置を争ひ肩を密接して其狀恰も數万の「ゴム球」を一個の「ゴム囊」内にお充たし強く壓搾するか如し(皮膚と組織)故に甲、乙を壓すれば乙又た丙と壓す然も丙又乙、甲を壓するか故に其間お一種の活氣即ち彈力あるものと現出す此活氣は此國人に固有なるものにして我國乃大和魂の如く非常に緊要あるものなり若し活氣消失すれば一縣若くは一郡の滅亡を來たり終には累を全國に波及することあり故

に君主たるものは此の場合に際して直ちに遞信(神經)及び中央銀行(心臟)に命令と下たして活氣の恢復せんことを勉む

此の如く凡て事大小となく直ちに君主の之れを制裁すること實に至るを盡せるか如きを以て全く專制國の觀ありと雖も各人民は毎常君主れ制裁を仰くものゝあらずして自治制度も亦頗る發達せり

以上の如く述へ來るときは恰も通俗の衛生會的の演舌を我々文明國に吹聴するは言語同斷の至りありと云ふ不滿の國々(聽取者)もあらん實に然り然れども諸君が今后通俗演舌會等にて演舌の材料とも思ひ且つは此人體國人民の自衛の道を知ると云ふことは一般に病理學上及治療學上乃一大基礎となり甚だ緊要の事件なるを以て茲は此演舌をなすに至れり幸に諒せよ

扱て炎症に充血を呈し筋の働作時と休息時に於

て血量に差異を生ずる等乃機轉は君主の命令のみにあらずして自治自衛の機能大に與て力あるものなり今狹溢なる空胴に細胞が互に壓迫しつゝ充滿せるに際し一朝其交互の壓力に變動を生ずれば必ずや其組織上の變化なるへかゝす之れ該細胞に輸出入の異動即ち新陳代謝に差異を生ずるものにして獨り細胞間のみならず細胞若くは組織と血管淋巴管との間に於ても常に此關係と有するものにして組織の生活せる間は此關係を保有するものとす今此關係を毛細管に就て説明せん普通毛細管は其壁薄弱弱して大凡そ二十乃至五十仙迷水銀柱の壓耐へすして其壓は周圍組織に向つて所謂緊張力として波及す而して此周圍組織は全彈力を有して恰も第二の毛細管壁の作用をなすこと彼の大脈管に於ける中層の如し大脈管の中層に變化(アテローム變成の如し)を呈するとき著しく血行の障害せら

るゝか如く毛細管の周圍組織も變化を呈すればして全く地方の自治制度に因るものにして恰も毛細管血行も亦阻礙せらるる即ち大脈管にありては中層の血壓に強力性の抗抵を呈すると同しくも細管にありては周圍組織は此作用を營爲す而して此弾力性抗抵は組織の種類に依りて差異あるものならず同一組織と雖も其働作時と休息時に於て異なることは己に E. Weber 氏か休息筋働作筋の弾力に關する試験に徴し明なりとす茲を以て此組織内に固有する弾力性及時々變化し得へき此弾力性の血液の流入に對し或は大或は小なる抗抵をなすは必然なることにして之れ即ち地方自治制度の實施せらるる所あり例へば空腹に際して口を開きて食を需め満腹すれば口を閉ちて之れを辭すると同しく今一組織か外襲に逢ひ或は働作の爲めに疲勞すれば其組織の脆弱となり弾力を減し伸ひ易く從て血液は流通し襲きに至るも乃は君主の制裁毫毛之きに關係せず

心臓の自宰機能に於けるが如し
故に曰く多くの局所疾病の發病の際組織は其弾力、緊張力を以て血液及淋液の流出流入を支配し自つらふ其必要に應せしむるものとす此の如く解き來りて漸く精密に論及すべきは實に限りなきことにして尙巧妙ある譬喩、實例も少なからざるへいと雖ども「ソハ」諸君の推測に任し今日は是にて止まん云云

漫 録

◎田舎の醫者 東江生

人口十萬其繁華北陸に冠たる金澤ですら何何醫院の表札立派に掲げて金が惜しくつて技倆をやふないれかほんどうに數で開け行く今日の醫術と平行することが出來ないのかい知らぬか菊の

葉は蔭干や蚯蚓の煎薬をつかつて罪れない病人を胡魔化す奴も居るさうだされは新田の太郎兵衛親爺や頬被りの若い者を相手の田舎の醫者殿が病人をみないで處方を書きコレラと聞いて居留守を使ふなどは理の當さに然らしむる所であらふが僕が今回出澤の途次和倉で偶然邂逅した一奇談の如きは自分かまのあたり見聞一ただけそれだけ今以て抱腹絶倒又堪はないのである

四月十三日暫時住み馴れし郷里を發し能奥の巒光水色を浴びながら氣船で和倉へ着いて例の山海館に宿つた夜は船の疲勞やら入浴の疲勞やらで枕に餘る濤の音も沖へ通ふ櫓の聲も一切夢中よ寢過して朝飯は如何だすと大坂訛りの下婢が翌朝の十時頃襖を開ける迄はまるで死人の様でありたさて十四日は宿僕の嚮導で東の山懷の藥師堂からその右手の公園を見物したが宿へ歸つても永い日の仕様事なしに浴槽で合宿の客と逆

風で小樽行きが戻つたの麥が一雨づゝ餘程伸びたのと二つ三つ拾ふ様な談話をして居るとき湯殿口へけたゝましく駈け來る者がある見まば主婦が呼吸をはづませるがゝれ客さん大變てございます我家の親類迄一寸來て下さい余は何事とも知らねば大變とは何事か起つたのですと問ふと何か彼か來て見ればわかりませすれ仲どんにいゝつけてをきますかゝ一よに來て下さいよと忽忙立去らうとしたが小戻りしてあなた屹度來て下さるてせうと念を推す余も詮方なく何だか知らないがあとかゝ參りませうと衣物を着羽織を引つ掛けて戸外へ出ると其處より大坂訛りのが待受けて案内する余は不審よ堪ねば全体何が起つたのだ何が出來たのだすやゝ妾は知ておまへんと云ふやがて着いたのはある宿屋で早や性急の主婦お引き摺られん計りに奥へ伴を連れ何が何やら夢心地の有邪無邪狐又誑されたか

と眉へ唾液を塗り乍ら南向きの八疊へ通ると此家の主人と覺しいのが絹夜具を被たまふ太儀さうに枕について居る傍に介抱して居る年増は女房てもわらうの枕元に二三貼の散薬かあるのを見て如何にも病人ふしう見ゆるのでよく見をは何ぞ圖らん彼は正に判然たる

下顎關節の脱臼

てあるのた即ち口腔は半は開きたる儘下顎は前方へ突出し頬は扁平且つ延び發言も自由ならぬのは最早疑ふへからずであるて余が疑團は釋然として氷解したと云ふものは昨夜余が革囊を披いたときその中に聴診器かあつたのを主婦り來台はせて居て貴客いお醫者様てすかと尋ねて居たさればこそ今日は親戚にかゝる患者り出來たのを余と資格ある一箇の醫師と信して之か治療を托せんと欲するに相違ない乃たさて仔細を問ふと主婦の返答はまつこうである日永乃退屈紛

れお主人は突然大欠伸をやつたとたんに顎か外れて言語も云はれず口も塞げなくなつたので須破大變と土地て有名の竹庵先生(假名)を請待した先生早速黒七子の五ッ紋節米の三枚りさねて意氣揚々としてやつて来て仔細らしう脈とみたがこまは顎か外れたのしやナニサ其様に心配するには及はかいよこの薬と飲めはすく直ると散薬三貼其處に置いてサッサと去つて了つたで喜んで散薬を服した一向効能の見ゆないけれども竹庵先生は神様の様なれ方て去年の暮も村端れの權助か横痰を病んで七尾病院で切らねい治らぬと云つたのを膏薬はりりてスツカリ治癒したほどの豪傑物であるたのらなほらねはならかいのゝそれに尙容易よあほらかいには薬か間違つて居るのはなからうかと再三使を出して先生の再診と求めたれと生憎急用か出來たさうてね出てがない病人は益々悪くあるはかりて最前も

眩暈すと云ふ騒さ己ひと得ず俄に貴客と御請待
申したのである

そこで余は枕元の散薬を掬いた白色で鹹味を帶
ひて居るところから考ふまは實にこそ疑もみさ
重炭酸曹達である！噫余のこれ

下顎關節の脱臼お重炭酸曹達

を用ひたる空前絶後の大々新療法に對して思ひ
すも失笑すると共に轉た感慨の念に堪へなかり
た明治維新以降我邦の醫學の一瀉千里の勢を以
て進み腹を割き骨を削り死を起して生に回し幾
多無辜の蒼生を非命の中より救ふに至りたのは
邦家の上より見るも斯學の方面より云ふも誠に
喜ばしい現象であるう邊僻の地未だ王化に霑は
ず這般の醫師濫りに虎威を擅まにするは慄以て
慨せざるへけんやぶ

余は直ちに整復に着手した患者は私に危んで居
る獨り患者のみならず女房や主婦も氣遣はしさ

うお余か舉動を凝視して居るのである余は法の
如く兩拇指を患者の口空に挿入し之と最後の臼
齒面に置き其他の指を下顎骨を握りそして下顎
骨を押し下けて頤部を少しく擧げ全時お顎骨を
后方に送りた見よ脱臼は忽ち正復せられ今迄さ
しもなやみになやみし病客も嬉々として笑ひ喋
々として語る様になりた

斯くの如くにして余の如き白面兒か竹庵先生の
妙腕を壓する程の手柄を行つたところから主人
及女房の喜びの實お普通であるに性急にして且何
正直なる主婦はこれこそたのみ甲斐ありた
と殆んど起て舞いんばのりてある

主人は謝禮としていくらか紙に包むたものと差
出したか余は手にも觸れなかりたをきてはどて
其夜余を自宅に招き美酒と温め鮮鱗を割き盛ん
に余を歡待して呉きた

淹留四日十七日昧旦腕車を驅けて金澤に向ふた

湖風一路菜花繚亂たるあたり美髯高帽の一紳士と載せて余の腕車と摺違つた軽車かある其時に車夫か云ひた彼か此地て有名は竹庵先生て御座りやすと

◎温泉めぐり

久保 輪壽

こは昨春予の猶寄宿舎ありし頃温泉めぐりせし時の旅行日記ありいたく時日の後れたるは未だ時機を得ざりしか爲めありさきと予はこの事を思ひ出づる毎未だ曾て當時の光景を追懷せざることなしこたひ會誌發刊に際し不文を省みそ左に掲げぬ固より見るべきものあけれども幸に一讀の榮を賜ひらは幸甚

明治丙申歲師走念八日

輪壽誌す

學期試験も既に終を告げ待ちに待ちたる春季休業とはなりぬ是に於てり數多の寮生の中には或は親を郷里に省するあり或は孤創漂然能奥の山

野み嘯くもあり或は綠蒼々たる廣野も或は烟波漂茫たる濱海に各其意に従て三々五々適歸し漸く春めきし我寮内も俄に寂寞秋の如くなりぬ寮友既に斯乃如し元來烟霞の癖ある予れいかてり此好時を空しく董花一朝の夢として過すに忍ひんや一夜室員相集まり雜談時を移す皆是れ無聊事なきに苦しむの士議は遂に温泉行となりて一決せらるし者固より其處なり則ち直に約して明朝を以て行を發せんとす急忙旅装を収め欣然枕を擁して寢に就く

三月三十一日(快晴)

東臺の曉鐘隱々耳を貫く快夢茲に破れ焉然一笑窓を排せり滿天晴快一點の浮雲を見す勇氣頓に倍し壯快言ひん方なるし乃匆々喫飯旅装と整へ六時寄宿舎を發す同行五名北川、藤澤、濱、吉村、安藤氏等とす

石川の廣原漠々として其儘くるところと知らす

燦然たる黃菜碧麥錦を布くが如く習々たる春風
雨肌を漂らし緑樹芳草雙眸の及ぶ處皆佳景ら
ざるはなく艷陽の美景の予輩か此行をして一層

爽快と覺へしむ吁時は是き春人の是れ春而して

相待て青山白水の間に放浪せんとす何等の清趣
ぞ漫々として遊び施々として行き一步又一歩或

の風光を談じ或の詩歌を吟じ十一時頃松任着一
茶亭又入る休憩數刻次に柏野、福留、水島等の諸
村を経て手取川又達す固と縣下第一の巨川楚江
水深くして流暴く白浪岸を嘯んで走る橋の長さ
三丁余蜿蜒百步杳かみ金盤に映じて彩霓漂渺猶
一片の活畫と見るか如し既にして寺井村に至る

人家稍々稠密戸々精巧華美の陶器(九谷燒)を飾
りつけの頗る人目を引けり五時頃小松町着旅
宿「そのや」に投す最も下等と宿にて殊に宿料迄
定め入りしこと故萬事待遇甚ぞ粗雑にして且強
飯咽と通らざりしのは呆然たりき夜十時頃床お

就く薄く垢染みたる夜具一衣にて冷氣肌お徹し
而かも半霽人静まつて半風子のひびく這ひ付
く様なりしふは閉口旅行第一の失敗ありき

四月一日(晴天)

午前九時出發す途中一友は兼て胃病の氣味あり
し上強飯過食の爲め腹痛嘔吐を催うしたるは氣
の毒にも笑止なり又一友は靴にて歩み續けし爲
め足疲勞し寸進半歩今は甘んじて弱兵懦卒の譏
りを受くるの止むを得ざるに至り遂に二人共に
後れ予等は先きに山代に着旅宿「丹羽屋」に投す
時恰も正前十二時暫くして二人車と雇ふて來り
會す

浴場は中央に二階建の總湯あり建築堅牢にして
樓上眺望最も佳なり楯間に懸るところれ「壽康
且寧」の四大字の額は軍醫總監松本順氏の揮毫
に係る宿舍は毎戸皆暗渠を以て温泉を引き浴室
亦頗る清潔壯麗と極む浴客甚だ多く彼に糸竹を

弄する乃遊客わきば此に手拳を戦はすの粹人あり全樓擧げて喧噪擾亂春は又別な物か醒めては浴し食しては浴し倦んては又浴す心神惴然長途の疲癒影ありやなや。

神かきの岩ねわき出るいて湯には

やまひの氷どけさらめやも

正四位下加茂縣主直兄

山代温泉よて

ゆの山や秋の夕邊いよそのこと 千代尼

なつ山乃したゝりしるき山湯哉 法橋能順

山にてもきかすいいつちほととぎす全

月ど花かんをする湯も庭に湧き 梅 室

此地東方處々に名所舊跡甚た多し

藥主寺は山代郷内の一莊にあり有名なる古刹にして頗る幽靜の地あり大堰神社は最も古き神社にて丘陵の上にあり椎淵と碧潭に臨み郊野を距て、連山を望む又甚だ絶景なり村東の山上に神

明宮あり樹林鬱蒼の間遙に芝山湖を見る其風色

愛すへし境内に湯元あり各旅舎は是より暗渠を

通して湯を引けりと云ふ是に對して服部神社あり

り縣社にして昔は廣大なる社殿樓門神庫等あり

しと云へども中古兵火お罹り寶物文書類悉く烏

有に歸し今のみ其跡を止むるれみ社頭老樹陰森

として頗る幽閑の地あり村の近傍九谷陶器製造

所あり真正の九谷竈元にして今猶盛に製造せり

山代鑛泉定量試験成績（藥學得業士平井圓山兩氏分拆に依る）

本泉は無色微濁にして微に硫化水素の臭を有

し味稍々鹹く反應微弱亞爾加里性を呈し其温

度は常温攝氏十五度半に於て攝氏六十六度と

保ち其千立方仙迷の中に、一、七〇四〇〇〇瓦

の固形分を含有し左乃成分よりなる

一、硫化加爾叟謨 〇、七一八〇八〇

一、格魯兒加留謨 〇、六〇五二〇〇

一、硫酸加留謨 〇、三三六一一〇

一、格魯兒那篤留謨 〇、〇一〇五六一 慢性胃加答兒 腺病 貧血諸病

一、格魯兒麻屈涅更謨 〇、〇〇八三一〇

一、鐵及礬土 〇、〇一九〇〇〇

一、硅酸 〇、〇五九七一一

一、硼酸 少 量

一、炭酸 少 量

一、磷酸 痕 跡

一、硫化水素 〇、〇〇五四四五

山代鑛泉醫治効用 (醫學士野田、岡部 兩氏鑑定ニヨル)

入浴又は外用して効ある疾病

雙麻質斯 痛風 慢性皮膚病

膀胱疾患 神經痛 肝臟病

腎臟病 脚氣 慢性氣管枝炎

子宮病 黴毒

浴 法

一回入浴時間 十五分乃至二十分 一日浴數 一回乃至三回

内服して効ある疾病

用 量

大人 三十乃至 五十瓦 小人 大人の半量或は四分の一量

毎朝一回或は朝夕に用ゆ

(明治二十九年七月九日改正)

次の日北川、藤澤、渡の三氏は金澤に歸らんとし
予は安藤吉村兩氏と共に山中温泉に行かんとす
四月二日(晴天)

午前十時半山代發丘岡透遊大聖寺川其間を流る
十一時半頃山中村お着す村の入口に「桂泉」あり
一大老桂ありて道を俺ふ其下に清泉湧出―清淨
掬すへし山代に比し人家稠密市街甚だ繁盛あり
山中木地は即ち此地の産物なり旅舎「吉野屋」に
投す室内裝飾周倒待遇甚だ佳るり午後偶然學友
小西、糸井兩氏と邂逅し即ち招きて相共に談ず
暫くして下婢來り入浴を勸ひ即ち行て共に浴す
入浴の都度下婢立て其下駄浴衣を保管す煩惱思

ふへし浴場の山代と異なりて戸々内湯なく只一大総湯(外湯)あるのみ建築稍々宏大なりと雖ども浴水混濁甚だ不潔を極む北隣に當り別に新しき浴室を見しも今猶普請中なりき茲又浴客甚だ多く入るもの出づるもの晝夜引き切れず朴訥なる談話囂々たる馬聲耳聾せんはあり

山中鑛泉定量試驗成績 (藥劑師金田氏)

(分拆に依る)

本泉は無色透明微に収斂味を有し硫化水素の臭ひを放ち少しく亞爾加里性の反應を呈す其温度は常溫攝氏十五度半の時攝氏四十九度なり其千立方仙迷中 一、三一〇〇瓦の固形分と有し左の成分よりなる

- 一、硫化水素 〇、〇〇一〇三
- 一、遊離炭酸 〇、四四七〇〇
- 一、硫酸加留叟謨 〇、四六三二〇
- 一、硫酸加留叟謨 〇、一四五五〇
- 一、硫酸那篤留謨 〇、三二三九〇

一、格魯兒加留叟謨 〇、一五四五〇

一、鐵及礬土 〇、〇六二八〇

一、硅酸 〇、一〇三七〇

一、苦土 痕 跡

一、礬酸 著 明

山中鑛泉醫治効用

(醫學士高安氏 鑑定に依る)

服用して効ある疾病

慢性胃加答兒

慢性腎臟病

用 量

大人一回(五勺以内) 小人一回(二勺以内)

一日三回以上但し食前を可とす

入浴して効ある疾病

慢性腸胃疾病

慢性膀胱加答兒

慢性癩麻質斯

慢性神經系病

慢性子宮病

貧血病

諸病恢復期

用 法

一回入浴時間 二十分 一回 三回
以 内 以 内

(明治二十九年四月二十三日改正)

此地は郡内の中央にあり地勢東西南の三面の山
峰を負ひ大聖寺川の清流其東と回り風光清絶自
ら一仙境を爲し山美水媚浴後散策の好地なり茲
を以て予等の如き無風流漢にして而して尙一泊
を定むるに至る山水乃勢力も亦大なる哉。

村南三丁余「蟋蟀橋」と稱する處あり即ち行て訪
ふ只見る森々たる巖岩絶壁の間怪岩奇石累々と
して連なり滄々たる河水其間に激し忽にして急
瀬となり急にして深潭となり一條の飛橋は此上
お架して彩霞乃如きを橋畔數棟の茶店は巨岩斷
崖に臨んで立つ稍々風流を學びたるなふんも若
し夫を系竹の音俗歌裡淫の其間より洩るゝお至
ては何等の没風景を溪流に沿ふて一條の素練怒
下するを見る高さ二丈餘りある岩の上より落ち
恰も元龍時を得ずして地に降るに似たり飛んで

は霰電とあり散ては雪雨となる遙かに之を望め
り宛然たる一個の別天地近く之を眺むれば灑然

たる一場の好樂園幽致神に逼り身は既に塵界を
脱して神心仙化するの思ひあり忙乎とて時の
移るを知らず既にして又「藥師堂」に詣づ堂は村
の西方水無山の半腹にあり磔を拾ふて上るもの
數十武磔盡くる處は即藥師堂あり市街眼下にあ
り眺望甚だ佳人をして舞雲詠歸の思ひあらしむ
頂上お本堂あり數多の小堂並び接す境内芭翁の
句あり

山中や菊の手折らし湯のにはひ 芭蕉
さめて行く湯の落尻やかきつはた 梅室
撫子も秋なる色や湯のかほり 蒼虬
この里にゆあみしふれば事繁き
世のわつらひもいゑぬへらあり
山中はいてゆかまーと思ひたつ
前田利邨公

人れこゑねはにきはひにけり

佐々木弘綱

茲に賞觀すること多事襟胸快活心氣豁然積日の鬱悶一時に散ず漫吟漫活夕陽の西に傾くを忘る即ち割愛歸路に就く。

四月三日(雨天)

午前十一時又山代お向つて出發す朝來細雨霏々として降りーさり天候甚だ陰鬱を覺ゆ雨具は皆山代の旅宿に残し置きし爲め餘義なく車を雇ふて歸る十二時頃山代着午後又小西糸井兩氏と會す而かも室と同ふし雜談笑話時を移し夜更け人鎮まりたる頃寢に就く。

四月四日(晴天)

午前八時床起此日小西、糸井二氏歸澤の途に就く予等の粟津温泉に回らんと去午後一時出發す途次「那谷寺」に寄る本郡は最古の巨刹なり寺門に入るや左側に法堂方丈あり苦むしたる一條の

石路茂林深碧の間を穿ち兩側に石燈籠ありいづれも古奇愛すへし一境寂然として人籟を聞かず落花隨葉も亦色あるを覺ゆ漸く入りて山峰奇峭巨石屏立し起つか如きものあり跳るが如きものあり忽ちして猛獅踏り忽にして強虎怒る其宏大の象自ら以て俗塵を洗ふに足る其外石佛、古碑、五重塔、傘亭、鐘樓、等各處お散在せり而して此幽靜閑雅なる美景は固より能く舌筆の盡す所にあらざるなり芭蕉翁句あり

石山の石より白し秋の月

芭蕉

賞觀良久して又發す山路峻峻歩行甚だ疲勞を感す午後四時頃粟津着旅宿「梅澤方」に投す

此地の山中山代に比し遙に寥々浴湯は毎戸おきども浴室狹猛にして頗る不潔を極む入浴一回にして又再びせず

粟津鑛泉定量試験成績

本泉は無色透明にして微に鹹味を有し

硫化水素の臭ひを放ち亞爾加里性反應を呈す其温度は常温攝氏十五度半の時攝氏四十四度なり其千立方仙迷中み含有する成分左の如し

- 一、乾燥固形分 二、二二一八四
- 一、硫酸鹽となしたるもの 二、三七三九九
- 一、硫化水素 〇、〇〇一七〇
- 一、格魯兒那篤留謨 〇、〇三九八五
- 一、格魯兒那篤留謨 〇、五七四六一
- 一、重碳酸那篤留謨 〇、七三三七五
- 一、硫酸那篤留謨 〇、七〇五二九
- 一、硫酸加留謨 〇、六四二六〇
- 一、重碳酸麻偏温叟謨 〇、〇〇七六九
- 一、硅酸 〇、〇三九八六
- 一、酸化鐵及礬土 〇、〇〇〇八六

慢性皮膚病 筋及關節僂麻質斯

關節強直 慢性腸胃加答兒

神經系統諸病 慢性泌尿生殖器諸病

滲出性吸収遲滯 腺 病

重病恢復期 治癒遲鈍の創傷

用法

一回入浴時間(十五分乃至三十分) 一日浴數(一回乃至四回)

内服して効ある疾病

肝臟病

泌尿器諸病 下腹充血 慢性腸胃加答兒

用量

大人一日(一乃至五) 小人(四分の一乃至二分の一量)

(明治二十九年五月八日改正)

四月日(快晴)

午前八時出發歸澤の途に就く此日滿天快晴一點

の浮雲を見ず回顧せば一場の廣野遠く連なり野

色蒼々遙に東方諸山と相接し人家點々茅屋參差

栗津鑛泉醫治効用

(醫學士小林泰氏鑑定に依る)

反應あり

入浴して効ある疾病

其間お位し而かも牧童堯夫の猥々焉相從來そる
を見る何等妙絶の春趣ぞ心目豁然平日の苦學以
て忘るゝに足きり宜なり里餘の長程指顧笑談の

野々市村に至る頃ひ時既に九時を過ぎ疲勞愈々
甚だしく今は寸歩も難くなりぬ即ち更に車に乗
して歸る

間に尽きしをや午後一時頃辰の口温泉着松崎方
に寄り休憩す此地の粟津み比し稍々繁盛なり近
來俄に改瓦増築の爲め宿舍浴室何れも清潔を極
む

此行や日を費やす六日行程三十余里名山崎川の
以て訪ふべきものなしも雖どもその吾輩學生の
心身の上に影響せること決して少々なふさるを
知る而かも如斯き氣樂ある將た愉快なる旅行と
爲すを得るの抑も予輩か破袴蔽衣寒窓に呻吟す

午後四時四十分出發す初め辰の口より直行して
手取川に達し松任に出て歸らんとす細やかある
畦を辿りて河邊山田村に當る不幸此日渡船多く
して遂に渡ると得ず即再び河岸に沿ひ辛じて本
道み出づ時に暮色蒼然遠きよりして至る吁日將
に暮れるんとして而も尙ほ七里の長程と有す足
疲れ胃飢ふ止まらん財政許さず車を雇わんか
又財政許さず一同の困難茲に至つて極まれりと
云ふべし然きども一行又少しは氣あり骨ある者
忽ち勇氣の興起されたり牛歩は馬行とありしも

るの時に限るにあらすや若しまた予輩にして他
日業と卒へ身と世に處するの曉み至るときり焉
んを以て此壯遊と此愉快を得へけんや寄語す諸
氏空語雜談の間に徒に春陰を費やし巾幗者流の
真似をなすを以て人生の能事終れりとなす勿き
卿等閑わらば須らく山水自然の間お放浪せよ得
る所豈啻み山水風月の雅懷のみならんや

◎ 鍊腸漫錄

鍊 腸

(其四) 辰の口行遠

今や春風嬾々淑氣囀々淡霧野に翳き濃艶庭に笑
以柳糸水邊も垂き禽鳥紅緑に狂ふ男兒豈お空し
く窓下に踟躕するの時ならんや果然々々行軍の
指示は扣所に飜々たり曰く四月十二日より向ふ
三日間辰の口に遠征を試みんと快なる哉

四月十二日快晴七時一同校庭に集合す軍に従ふ
もの今井統監部長、木村、金子統監部員、磯田指
揮官兼審判官を始として職員十數名學生二百七
十名たり茲に於て吾が醫學部學生を第一中隊に
大學豫科二三年生を第二中隊に同一年生を第三
中隊に編成す七時半喇唳たる鉄笛高く長閑けき
光風に響き揚々鞭を擧げて南道に就く鐵蹄肅々
隊伍堂堂六半郊外に出ずまば暖雲錦繡を織り輕
風袂を拂ひ爽氣身に迫り萬慮條に沈む菜花千里
の野を彩り清流は萬頂の面と綴り雲雀天空に翔
け農夫田に鋤を休む實に眼お映するものは一刻
千金の一大活畫耳と鼓するものは天國の福音か

正午鶴來町に到着し中飯を喫す茲に於て第三中
隊を南軍として先發せしめ第一二中隊を北軍と
して止まらしむ蓋し南軍の其の本隊を援護して
此支路を辿り豫め派出警備せられたる北軍の支
隊に衝突して端なく戰端を開きたるものに擬す
依て北軍は吾が第一中隊と以て前衛となす漢々
たる手取の河洲に散開して長蛇の如く砲擊喚叫
瀕りに至る天地驚き山川懼る鼓躁衝突矛戟電光
を添へ呼聲震雷を奪ふ天狗の岩となん云へる渡
船場を涉りて濛煙霧中に邁進す終お全勢を悉く
して南軍お吶喊し以て彼を敗蹟せしむ時正さよ
三時半なり隊伍整々軍歌空に充ち豪吟地に震ふ
五時半辰の口に達し分宿すること六家
十三日 行軍固有乃騷躁も何時しか絶れて尉聲
寥莫を破り各華胥お遊びて快夢濃やかあるの時
忽條また驀然として非常喇唳耳底をつんざく驚
顛狼狽戎裝を整へて出ずれば正さに朝二時半な

り第二中隊を南軍とし第一三中隊を北軍とし曰く南軍竊かに來りて我が宿營を襲ふ須らく擊退すへしと依て第三中隊を前衛となし以て村外に至る團月已に落ちて星澄み天地寂莫悽寥聞くものは鷄唱犬吠にあらさきハ颯々たる松籟のみ冷霜野を被ひて指踏凍結せんとす殆んと塵寰を脱却して仙境に愁歩するものゝ如く暫くよして砲聲幽谷に響き紅蛇闇黒を縫ひ眉宇の間恍惚たり終に曉色蒼茫雲煙迷離其の風景盡さんとするも能はじ七時演習と止む蓋し此の演習たるや壯絶悽愴と云はんよりは寧ろ靜逸幽玄と形容するこそ適當かふめ乃ち一篇を歌いんとするも不文固より盡す能はざるを恨む

わりわけ月の影をちて

星のひかりも名残げに

神のめぐみの露ふかし

夜を守る犬の音絶ぬつ

流るゝ水のさくゝと

うき世を外の心地せを

いましもながる星一ツ

汝も人目をしのびつゝ

戀しきかたに通ふらや

彼處に闇を縫ふて行く

丸光りのいと凄く

うらめる敵に走るあり

星もろ共に夜はきわた

薄霧まよふやまの端に

まろけき帽の四ツ五ツ

鳥もねぐらと立ち離れ

鄙歌さゆるあさかせに

いなゝく馬の聲きよし

朝食後令あり終日軍と休めん須く英氣を涵養すべしと茲は於て圍碁を耽るものあり沐浴に精氣を清むるものあり哦咏自適薰茶の味を賞するも

のあり野外を跋渉し麗葩と摘むものあり詩歌發句に鏽腸を絞るも亦少からず

十四日 八時發程準備終りて軒端に整列し故郷の歸途よ就く此日陰雲愁霞四方に漲る九時手取川に着し岩内の渡を渉る到る處里女童男珍しげに罵り合ふも罪なくして可憐あり十二時半松任

町に着し中飯の令下るや各先を争ふてあんころ屋に襲撃す主婦驚さ下婢迷ひ何きも落城の恨を訴へざるはな一時半松任と辭し野々市に一憩す進むに従ひ細雨肅々として至る遠江は山濃淡高低連綿疊々たり路傍翠松數里に餘り櫻花其間に參差斷續す未だ華麗婀娜繚爛逸美の眼を奪ふものあらずと雖も彼ハ醉客夢士に弄はるゝを嫌ひ獨り跋歩淋汗の旅人を慰めんとて樹てるなり三時校庭に着し各道を急ぎて家に飯る
陸軍二等軍醫生駒廣太郎氏の指揮の下に河合、松井、伍堂、金森、宇賀治、安村及中川の七名衛生

隊員として軍お従ふ而して衛生隊員の手を煩はしたる患者の數の總計六十二名にして之を類別すれば水胞十四名手足の擦傷十三名挫傷十名筋疲勞七名寒胃六名齒痛四名胃痛、咽頭加答兒、脚趾辨創二名眩暈一名食傷一名なりしと云ふ

◎端艇競漕會

河合 覽

漫々たる蓮湖は水の微風も破れて白鷗の夢を醒まし兼六園の櫻又正に靉々として士女の袂を埋む今や爐を擁し空しく天を白眼ひの時は去り一臂を揮ひ一棹を投げ青年は壯遊を試むるの時來れり議は委員の間も成り四月十七日と以て大野川流に本校第二回春季端艇大競争會の盛會を催さんどす期に先て天候日に穩かならず風神雨伯漫りも威と逞ふし予輩は懸念實に一方ならざりしも儻に當日は早曉より妖雲一掃し風さへ羽翼を斂めしかば會員學生の素より市内近郷の士女の今日の盛舉を堵んどして足と運ぶもの驛々た

り八時を期し第一回より逐次競争を試む艇は數島、葦原、瑞穂の三隻之に赤白青の競枝者を容る決勝點の大野橋の僅かに上流に於て好位置と占め發漕點は其の上流千メートルの浮標を以て定む用意の喇叭肅々として四隣を掠め進めの號炮一發耳朵を衝き赤白青必死となりて漕ぎ始め赤進み白超へ青乗取り八百—五百—二百メートル呼吸喘々腕は痺れ眼は霞み敵進むか已れ勝つか只だコックスの白き手巾の空お舞ひ掬ふ水煙の頬に飛んでヒヤリ〜と感するあるのみアハヤ一發の號炮の決勝點の彼方より段々と響けば勝ちたるものは權と擧げ笑を放ち贏けたるものは青き溜息を放ちて蠢然たり殊に當日來濱競争として石川縣尋常師範學校撰手の赤に同中學校撰手は白に乗じ各特獨の技倆を揮ひて勝を占めんと勢ひ込で現はれ出で各同學の士は手よ汗握りて勝負を危ぶみ兩岸に立ち踵を擡げ掛聲を放ち

一時の湧くが如くなりしも如何なる機にや赤の手並は勝りけん調子相和し見事決勝點に乗付き號炮一發氣乃毒なりしは赤の乗手！餘興として見物は端艇と和船との競争なりき下金石屈強の船方が諸肌脱ぎてエーヤ〜の掛聲に必死となりて力身返へりし勇ましかりしが始終端艇の尾を追ひしは競漕とは見ぬさりき尙ほ最後には醫學部三四年(赤)及び一二年(白)の撰手競漕あり重大なる責任を双肩に負ひ兩腕に權片を掌りていと輕妙あり双龍玉を競ひ兩虎肉を争ふさま勇ましも勇まし終に一艇の差を以てメダルは赤の撰手の胸に爛然たり其の得意思ふべし大學豫科撰手競争は半艇の差にて白の勝利とは何れも目醒〜かりき閉會に及びしは黄昏なりき

雜

報

○校長交代 三月十三日大嶋校長非職を命せられ文部省參事官川上彦次氏本校々長に任せられたり

又職員各位には從來の如く益々勉勵薰陶の勞を盡さまむことを希望す云々
と是に於て式終る

○舊校長告别式 三月十三日午後二時より本校靜勝館に於て告别の式あり職員學生一同集合席定まるや大島舊校長告げて曰く

○新校長披露式 三月二十七日川上新任校長披露式を本校靜勝館に擧げらる職員及學生一同整列するや川上校長の席に就き唯だ熱心と誠實とを以て校務と處理し前校長と同一の主義方針を取るべき旨を宣言説示せられ茲に式を終へ次で職員を倫理講堂に集め更に新任の披露を兼ね希望の辭と述べられたり

予は昨夜俄に其筋より非職の命に接し今日親愛なる諸子と別るゝの不幸を見るに至る回顧すまば明治二十五年本校多少波亂の後を承け爾來職に就くこと茲に五裘葛而も未だ一の實蹟を納むるに及ばずして去るに深く自ら恥づる所なり然れども唯一片諸子を惻愛したるの赤情に至つては敢て他人ふ一步も譲らざりしを自信す

○大島前校長送別會 三月十九日本校職員一同大嶋前校長の爲め野田寺町鏝甚樓に於て送別の宴を張る當日木村醫學士の演述あり其大要左の如し

尙ほ新校長川上氏は予が親友にして教育の經歷あるの士なれば諸子乞ふ一層其統揮を奉じ益々研鑽勵學せふまことを

本日前校長大嶋閣下の送別會を開くに際し閣下の快く臨席を辱ふしたるは我々の光榮とする所であります又滿場の諸君も能く賛同せら

れ此盛宴を張ることを得たるは深く感謝する所でありますこれ全く閣下の徳望の至すところと存じます閣下の本校に於ける御効績に就ては茲に充分述べ度思ひまするも元來啗辨の私みれば所謂虎を繪かんとして猫と得る様にては却て恐縮でありますし且諸君も御熟知の事でありますから敢て喋々は致しませぬが顧みれば五年前に於ける本校の狀態は實に北海の怒濤天を突き鳴動全國の新聞紙上に響き渡り非常の凄烈を極めました此時に際し閣下御來任になり十年一日乃如く校務を執るる格正周到職員生徒に對せらるる温厚寛大以て校内圓滿事務整頓し學業進歩し今や梅花は靄郁たる芳香を放ち櫻花は爛熳たる光輝を發たんとするの曉に至り突然閣下本校を去らるることゝ相成りました誠に慮外のことにて深く本校の爲め惜むべきことであります殊に來年

度に於て大に擴張の御計畫も相立ち國會に於ても豫算案は都合克く決議し最早や直ちに來月より實施せられんとするの御精神でありました夫れ故閣下が今や此計畫を實行せずして校を去るは甚だ残念なりと申さざりました私共に於ても亦實に遺憾とする所でありまして閣下の此一言は深く骨髓に徹し殆んど同情の涙を灑ぎました斯く申しては折角の盛宴も濕り勝になりますから閣下初め來會の諸君不行届の點は御用捨あり健康を害せぬ様充分召し上ふんことと希望します終りに大島閣下の健康を祝し萬歳と祈ります云々

翌二十日本校學生一同は里見町大野屋に招請し離宴を張る此日陰雲濛々として茂林を蔽ひ降雨肅々として歌むことなきも拘はらず會するもの三百餘名藤岡氏等數番の演述あり大嶋前校長は明快なる音調を以て告別の辭を述べらる此の

如くに―送別の會は終りしと雖も予輩の衷情は依然として先生を去ることな―嗚呼大嶋前校長と別る爾後唯夫れ秀乎たる其風采と想望し戀々たる其訓誨を嚴守し平素の德澤に酬ゆる所あらんのみ

○學生行軍 四月十二日本校學生は辰の口へ向け行軍し同月十四日歸校す

○端艇競漕會 四月十七日大野河流に於て本校第二回春季端艇競漕會の催しあり昨年に準―て盛會を極めたり

○紀念日 四月十八日は紀念日たり―を以て靜勝館に於て種樹式を舉げ殊に本年は恰かも十年に相當するを以て校長代理木村教授祝辭と朗讀し茶菓の饗ありたり

○本校學生身躰檢査 今般文部省令お基き五月廿四日より學生の身躰檢査を舉行せり

○十全會々長 大嶋前校長非職に付自然本會々

長も空位と爲り居りしが今般評議員より川上校長を推して就任を願ひ出し處愈々承諾せられたり

○藥學科學生修學旅行 藥學科第一二年生は六月四日より五泊の豫定を以て越前國南條郡大門附近へ向け藥用植物採取の爲め修學旅行をなせり

○甲午藥學會 五月九日午後一時より公園内覽勝亭に於て其四月例會を開けり當日製藥士櫻井小平太氏の「獨逸法令の一二お就て」ある演題の下お於て藥學に關係を有する獨逸新法令の二三

お就き丁寧なる解釋を與へられたり尙此他に二三乃講話あるべき筈なりしも何れも差支のため次會へ讀る事とせり午後五時頃に至り散會せり

○裁判化學 嚮きお其第一卷と刊行して大に學友同志乃喝采を博せし前々藥學科三年生の翻譯お係はる「オット氏裁判化學」の續稿は目下編輯

委員に於て校訂改訂中の由なれば其刊行を見る將さに近況をあらん

○外科實驗室 此程新築になりたる外科實驗室は他日追々動物試験、化學的検査等を施すの目的なりと云ふ

○小兒科新設 從來小兒科は婦人科と合併し教授小川學士之を擔當せられたるも去る四月以來全く獨立して教授高橋學士の指揮の下に臨床實習をなすことゝなれり

○赤十字社看護婦養成 前々號に報せしか如く赤十字社石川支部は嚮きに看護人養成の設計あり今又看護婦養成と企てゝ生徒二十名を募集し已に四月一日より之を金澤病院に囑托して其の實地練習を爲さしむ尙聞く所に據きは授業時間は當分一週六時卒業期限は二ヶ年にして爾後毎年二十名つゝを募集し都合百名を養成するの見込なりと云ふ

○大島前校長 四月八日愈々當地と出發せられ上京の途より上る此日本校職員及學生一同は勿論其他知己れ人々等無慮數百名野町郊端まで見送りを爲し最と盛にてありき

○川上校長 先き又會議の爲め上京せられたる處去る二十八日歸校せられり

○高安主事 會議の爲め上京中の處去る二十三日歸校せられたり

○木村教授 墓參の爲め四月廿六日出發歸郷同月三十日歸校又同教授は川上校長不在中代理を爲せり

○野田教授 學術取調の爲め四月一日上京し同月二十日歸校せらる

○山崎教授 病氣療養の爲め五月廿七日より二週間山代温泉へ趣かる

○高橋教授 醫學士高橋剛吉氏今般本校教授に任せられ藥物學診斷學及び小兒科學を擔任せら

る

る

る

醫學部各學科教務を囑托せられたり

○村上教授 四月十九日學術研究の爲め小松へ

岡田 剛吉氏 (婦人科學)

出張を命せられたる同教授は醫學部四年生數名

加藤 慶三氏 (眼科學)

と引率して同處能美病院に到り病牀解剖施行の

松本善次郎氏 (外科學)

上翌日歸校せられたり

森島 彦夫氏 (内科學)

○堤助教 五月三十一日藥學科學生修學旅行

生駒廣太郎氏 (小兒科學)

に付出張を命せらる

東 良平氏 (皮膚病學)

○松本森嶋兩助教 本校助教松本善次郎氏

三木 榮末氏 (藥學)

(外科學)及び同森島彦夫氏(藥物學)は各職を辭

○鈴木學士 獨逸國留學の鈴木文太郎氏は今回

して金澤病院醫員を拜命し松本氏は外科へ森嶋

伯林より左の所に轉移せられたり蓋し該所は元

氏は内科へ勤務せらる

醫科大學雇教師「ディッタ」氏の居在地なる爲め

○圓山副手 五月廿八日上京せらる

大に便利を感せらるゝと云ふ且つ同學士は一、

○上村副手 生理學副手上村勇夫氏は今般職を

二、五、一〇、二〇、五〇、ペンニツロー、二、三、五

辭して上京慈惠醫院醫學校へ入學せられたる由

、二〇マルク各貨幣の模圖と贈送せられたり

○富永副手 石川縣農學校卒業生獸醫富永浩氏

Ketzerbachstrasse 57

は上村氏後任として生理學副手を命せらる

Marburg a/L Deutschland

○教務囑托 今般左の金澤病院醫員諸氏は本校

○鶴見軍醫 賛成會員陸軍二等軍醫鶴見金十郎

氏は金澤衛戍病院より臺中縣衛戍病院に轉任せられたり

○岡本醫員 金澤病院婦人科醫員岡本京太郎氏は今般徴兵検査員を囑託せられたり

○鈴木醫員 金澤病院内科醫員鈴木寛之助氏は今般海軍少軍醫候補生募集に應じ試験に及第し

て先月下旬當地出發横須賀鎮守府病院附を命ぜらる

○敷波醫員 金澤病院外科醫員敷波重次郎氏は今般職を辭して上京醫科大學解剖學助手を命ぜられたり

○室田醫員 金澤病院外科醫員室田万三郎氏は今般職を辭して郷里に歸り開業せらる

○田所進君逝く 會員醫科第三年生田所進君は本年四月初旬より金澤病院に於て療病中の處養

生相叶はず遂に去る五月廿四日同所に於て病没す噫悲夫嚮きには同級生森口君の訃音あり今又

君の不幸に接す願ふも同君の如き學業未だ田所全く卒へざるも既に業に其半ばを過ぎ今や百花

實を結ばんとするの秋も遠きあわらざるに意はざりき今は唯空しく北邙一片の煙に化せしとは

實は是れ父兄其人の悲哀に止まらずして深く吾同學の痛惜に堪へざる所なり嗚呼哀哉

● 寄贈書目

一 臨床的細菌検査法 一部 編者遠城兵造君

一 醫海時報 百四十六号、九号、百五十号、五十

一号、五十二号、五十三号 同 社

一 日本醫事週報 百十六号、七号、八号、九号、二

十号 同 社

一 順天堂醫事研究會雜誌 二百四十号、六号、七

号、八号 同會事務所

一 公衆醫事第一卷第三号、第四号 同會事務所

一 中外醫事新報四百九号四百十号 同 社

一 國家醫學會雜誌 百十九号、百二十号

一 助産の槩 九号、十号 緒方病院助産婦學會

同會事務所

一 中央醫學會雜誌 十七号 同會 一 善那氏種痘發明百年紀念會報告書 同紀念會

一 濟生學會醫事新報五十一号、二号 同會 一 北辰會雜誌 十二号、十三号、十五号 同會

一 日本眼科學會雜誌第一卷第一第二第三号合本 一 甲午藥學會々報 同會

廣 告

拜啓各位益御多祥大慶ノ至リニ奉存候借故太田醫學士記念品購求費ノ儀御蔭ヲ以テ多額ノ集金出來致候段故學士ノ家族及發起人一同ニ代リ茲ニ奉銘謝候

借右ハ昨年十一月卅日限り集金ノ豫告ニ付遅クモ年内ニハ結果御報告申上度心組ニ有之候處何分右ノ運ニ參リ兼テ候テ追々延引仕リ舊年末當市發起人丈ケ集會致シ物品選擇ニ付大略協議ヲ遂ケ又當市以外ノ發起人エモ打合セ尙故學士ノ嚴君ニモ意見ヲ質シ大要左ノ如ク決着仕候

一、紀念品ハ圖書タルヘキ

一、一半ハ普通醫學ニ關スルモノ

一、一半ハ故學士ノ專修カレタル産科婦人科ニ關スルモノ

右ノ方針ヲ以テ適應ノ圖書相尋候ヘトモ至急御調ヒ兼候事情モ有之彼此御報告怠慢ニ涉リ候様ニテ甚不本意ニ付キ當市發起人中ニモ相談シ一ト先ツ現在金ヲ當市尾張町平野銀行エ當座預ケトナ

● 廣 告

八十八

シ追テ圖書入手ノ上悉皆精算更ニ御報告可仕先ハ今日迄ノ成行大略申上度如此ニ御座候也
 再啓昨年十二月廿二日迄ノ集金ハ出費ヲ引去リ同日殘金六拾貳圓參拾錢ヲ右銀行エ預ケ今般ハ
 其後ノ集金ニ同ク出費ヲ引キ去リ尙今回ノ印刷郵稅費等ヲ見込ニ殘金貳拾五圓
 ヲ右銀行エ預クルノ都合ニ御座候

金澤市味噌藏町下中丁二番地

明治三十年三月八日

岡 部 忠

同市同町同丁九十一番地

小 川 勝 陳

醫學士太田未夫君紀念品購入義捐芳名

(金圓取扱人ノ外ハ到着順)

金貳 圓	澤邊 保雄君	金壹 圓	山本貞二郎君	金貳 圓	逸見文九郎君
金五拾錢	清水 澄君	金壹 圓	若杉喜三郎君	金壹 圓	大島 誠治君
金壹 圓	水野 欽次君	金壹 圓	緒方 正清君	金壹 圓	足立謙一郎君
金壹 圓	千葉彌一郎君	金壹 圓	下平 用彩君	金貳 圓	小林 文泰君
金壹 圓	近藤 次繁君	金貳 圓	佐藤 勤也君	金壹 圓	北川乙次郎君
金壹 圓	遠 田 清君	金貳 圓	高島吉三郎君	金九拾錢	井上通泰君
金貳 圓	野田 忠廣君	金貳 圓	金子 治郎君	金五拾錢	桂田富士郎君
					高橋金一郎君
					平松駒太郎君

●廣告

九十

金五拾錢	野村 治助君	金貳圓	高峰 精一君	金壹圓	高橋善太郎君
金壹圓	中村 順二君	金貳圓	鈴木文太郎君	金貳圓	上田 計二君
金五拾錢	江間 謙治君	金五拾錢	小川 孜成君	金參拾錢	渡邊爲三郎君
金參圓	長谷川 泰君	義捐廣告二回	中外醫事新報社君	同	醫事新聞社君
同	濟生學舎醫事新報君	同	十全會君	金貳圓	岡部 忠
金貳圓	小川 勝陳	總計金九拾四圓參十參錢也	外ニ四社廣告各一回分		

廣告

●日本眼科學會雜誌

第壹卷第一號至第四號

右發行ス ●購讀ヲ望マル、方ハ一ヶ年分(十二號)前金貳圓四拾錢ヲ添ヘテ東京市京橋區北槇町一番地桐淵道齋方日本眼科學會假事務所エ申込マルベシ ●此雜誌ハ日本眼科學會々員(醫師ニ限ル會費一ヶ年分前金貳圓)エハ無代價頒布ス